

思

考

の

障

景

ガラスの中の無菌室で、絵にかいた餅のような国際交流を論ずることの不毛さ。その限界を克服したくて、毎夏こんな課題を学生に課してきた。水族館のガラスを割ってもしようがないから、せめて水族館でアルバイトをして、ふだん顧客として見ているのとは反対側から世界を見てごらん。そこで気づいたこと、発見したことをレポートにまとめてごらん。それが比較文化の出発点だ。内側から見たのと、外側から見たのの違い。その違いに驚き、違いを支える仕組みを知的に分析し、理解し、そのうえで違いや落差そのものを、共感をもって受け入れる情操を養いたい。もちろん水族館はひとつの比喻に過ぎない。外から日本社会を見直す目を養うこと、そこに留学生交換の意義もあろう。

とはいえ、違いを理解でき、違いに耐えられる精神的な免疫の強化を図ることが異文化教育の目的なのだろうか。もちろん真質なものをもたすら排斥しようとする傾向に潜む危険を自覚してもらふ必要はある。だが異文化への精神的抵抗力の強い学生に優位を与えるのでは、ひとつの超人思想に成りかねない。むしろ真質なものに耐えられない、抵抗力の弱い学生たちをどうcareしてゆくのか。その臨床哲学が、今求められているようだ。

日本に安住し、外の世界にたいして心を閉じてしまう若者たち。その殻を破ろうとすれば、今度は、日本を脱出して戻らなくなる学生を製造して、親御さんから責任を追及されかねない。事なかれ主義という文脈に埋没するのが、日本の没倫理ということか。

連載 39
異文化体験への誘いとその処方
大学生の夏休み

この国の大学で、学生たちはいったい何を学ぶべきなのか。世渡りのためのノウ・ハウや受験術の延長としてのテクノロジーに、コンピュータ・リテラシー。経済界の思惑を背景とした戦略が、市場原理に乗って推進されるばかりで、背景をなす哲学は不在のままだ。

恐らくは「国際化時代の異文化理解」といったお題目のもと、比較文化とか、異文化理解などという授業科目が、多数目につくようになった。だがそこでどのような授業がされているのか。連絡網もなく、今のところ各担当者は、試行錯誤を繰り返しているようだ。

学生たちの反応を見てみると、どうやら「国際理解」というお題目を称賛し、自分も「国際人になりたいと思います」といった能天気な宣言をレポートの結論に書き付ければ、それで単位がもらえるもの、と心得ているようだ。その裏側で、実用にならない英語教育への不満が噴出し、英語学教官の立腹と反目と唇直りを招く、という構図が一般的だ。

日本の大学での「比較文化論」は、まるで水族館でガラス越しに、いろんな場所のきれいな魚を観察しているようなものだ、とつくづく思う。識別能力検定の穴埋め試験でよい成績を取れば、それでおしまい。国境の外に広がる世界に直接触れるには、防御ガラスが邪魔になる。だがガラスを割れば、水がどっと流れ込んできて、大変なことになる。そんな事故を起こせば、世間様からお叱りを頂戴する。教師たるものも、つい、及び腰になってしまう。ホーム・ステイでも、安全な教室の壁を越えるような授業は敬遠される。

国際日本文化研究センター研究員・
総合研究大学院大学助教
稲賀繁美

稲賀繁美
Inaga Shigemitsu